



TITLE:

<Book Review>Victor Purcell, The Memoirs of a Malayan Official, London, Cassel & Co. Ltd., 1965,373p / Victor Purcell, The Chinese in Southeast Asia, Second Edition; London : Oxford University Press, 1965,xvi+640p / Victor Purcell, Malaysia, London : Thames and Hudson, 1965,224p

AUTHOR(S):

本岡, 武

CITATION:

本岡, 武. <Book Review>Victor Purcell, The Memoirs of a Malayan Official, London, Cassel & Co. Ltd., 1965,373p / Victor Purcell, The Chinese in Southeast Asia, Second Edition; London : Oxford University Press, 1965,xvi+640p / Victor Purcell, Malays ...

ISSUE DATE:

1966-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55182>

RIGHT:

図書紹介

Victor Purcell. *The Memoirs of a Malayan Official*. London: Cassel & Co. Ltd., 1965. 373p.

Victor Purcell. *The Chinese in Southeast Asia*. Second Edition; London: Oxford University Press, 1965. xvi+640p.

Victor Purcell. *Malaysia*. London: Thames and Hudson, 1965. 224p.

ようやく春らしくなって、緑したたるばかりの1961年5月の終りごろ、ケンブリッジ大学を訪ね、Victor Purcell 博士に Trinity College の教官のクラブで、イギリス式の午後のお茶を御馳走になったことを、いま、つくづく、なつかしく思います。Purcell 博士は訪れたのは、臼井二尚・棚瀬襄爾両教授とともに、欧米における東南アジア研究状況を調査するためであった。臼井教授があらかじめ連絡しておかれたために、British Council がイギリスにおける東南アジア専門の leading scholars に面会できるよう、見事に手配をしてくれた。そのうちの1人、Purcell 博士は温顔をたたえて、これまでの自分のマラヤでの経験や、現在の仕事を話してくださった。しかし、そのころ、モリモリ著作に没頭しておられたのだが、そういう気配はぜんぜんうかがわれなかった。むしろ、植民地官吏を引退して、母校で悠々と余生を楽しまれているという感じだった。それから4年たらず、博士の逝去を知った。しかも、逝去後ここに紹介する3冊の著書がつぎつぎとあらわれた。つつしんで哀悼の意を表するとともに、遺著3冊を紹介したい。

Purcell 博士の生涯は、*The Memoirs of a Malayan Official* に詳しい。これは、ほんとうに面白い本だ。1896年に生まれ、Bancroft's School を卒業するやいなや、18才で新任少尉の軍装で、生まれてはじめて1等車にのり、Green Howards 連隊に赴任するところからはじまる。フランス戦線の Ypres から Sailly-Saillisel への激戦、さらに Chemin des Dames の苦戦、この間2度負傷し、さいごに俘虜となる。平和恢

復とともにケンブリッジの Trinity College に入る。

1921年に Malayan Civil Service に合格して、Kuala Lumpur に到着する。ここで、かれは躊躇なく中国語の専攻を決定した。このあたりの1節は人生の運命の不可思議を思わせる。この若い官補が寄宿していた植民地高官に、その旨を告げる。そのときの対話はつぎのようだ。高官は、しばらく黙っていてから、真剣な口調で話しはじめた。

「パーセル、君は何をしたか知っているかね。」

「いいえ、まったくわかりません。」

「君は君の生涯を駄目にしてしまった。君は決して総督になれない。弁務官さえむずかしい。“専門家”になるにすぎないよ。」

「申しわけございません。でも、なんとかして、中国語が習いたいのです。」

この対話のあと、広東さらに北京へ留学に派遣される。かくして華僑研究者としての Purcell 博士が生まれた。留学からマラヤに帰って、華僑担当官となる。一時はクリスマス群島に転勤するが、またマラヤにもどり、上級裁判所に勤務し、移民官を経験する。1946年12月の太平洋戦争のときはアメリカに出張中であつたが、大佐に昇進され、最後には情報局長官となる。

こうした植民地官吏として終始中国人問題にたずさわつたが、その間、華僑をはじめ中国史について、ひじょうな熱意をいだきつづけた。戦後再びマラヤに戻り、イギリス軍政下の華僑問題最高顧問となる。しかし55才の定年まで働くよりも学究生活を望んで1946年に、25カ年の Colonial Service から引退する。

自叙伝はここで終るが、そのあとで博士は1946年から1948年にかけて、国連のアジア極東地域顧問となる。1949年、はじめて待望の純学究生活に入り、ケンブリッジ大学の極東史の Lecturer となる。1963年に引退し、いよいよ著述に没頭され、遺作3冊のほか、1965年1月2日逝去のときには、3巻からなる中国革命史を執筆中であつた。

博士の著述は、ひじょうに多いが、ここに紹介する3冊のほか、代表的なものとして、

The Chinese in Malaya. 1948.

The Chinese in Southeast Asia. 1951. (ここに紹介する1冊の初版)

Malaya—Communist or Free? 1954.

China, Nations of the Modern World. 1962.

The Revolution in Southeast Asia. 1962.

A Background to the Boxer Uprising. 1962.

などがある。まことに、マラヤ華僑問題を中心としての膨大な研究業績を残されたのである。自叙伝は、1946年 Malayan Civil Service 退官後の続巻を書くことを約束されていたが、これはとうとう執筆されないうちに終わった。Purcell 博士が代表的な1人であるが、イギリスは植民地当時、植民地官吏であるとともに、専門的な業績をあげた多くの学者をもった。おどろくべきことであり、また羨しいかぎりである。

「東南アジアにおける華僑」は、Purcell 博士の名著であるといつてよい。初版が1951年に刊行されたが、その後10数年の変化発展を補足修正された第2版は、現在、われわれがもちうる東南アジア華僑研究の最もまとまった、スタンダードなものである。

この大著は博士が一生をかけたものといつてよい。第1編は総論であって、東南アジアにおける華僑の分布・中国の初期の東南アジアへの接触・南洋への大量移住・華僑社会の特質をとりあげる。第2編以下は、国別の華僑の歴史的発展にかんする研究であって、ビルマ、タイ、ベトナム、カンボジア、ラオス、マラヤとシンガポール、英領ボルネオ、インドネシアおよびフィリピンにわかれる。Skinner 教授の有名な華僑研究とはちがって、本書はけっして分析的でもなければ、社会科学的方法が駆使されたものでもない。しかし、できるかぎり忠実に歴史的事実をとりまとめ明らかにしようとしたものである。この意味において、東南アジア華僑史としては、これにまさるものがない。しかも、判断は公正だ。さすがに、たんに文献によっただけでなく、1/4世紀にわたっての現地での華僑との体験をとおしての著作だけに、まことに妥当な解釈や説明にうたれる。東南アジアにおける華僑の占める重要性からして、広く東南アジアの問題に興味をもつ人に、基礎的な文献として強く推賞する。

同じく遺著 *Malaysia* は、博士の Malaysia の体験と研究との総合大成である。さきの東南アジア華僑研究とは異なって、New Nations and Peoples 双書の1

巻であるため、できるだけ、わかりやすくまた簡潔なマレーシアの紹介を本書は目的としている。まさに、一気に書きおろされたとの感じが強い。できるだけ事実には忠実であろうとするだけに、1965年いよいよ激烈となったインドネシアとの対決までとりあげられているが、1965年8月のマレーシアからのシンガポールにまでフォローされていないのは残念だ。

本書のあらましを紹介しよう。まず18世紀までのマラヤの歴史からはじまる。ついで、マラヤの民族、19世紀のイギリスの進出、英領統治、戦後のマラヤの独立への過程、マラヤ独立、サラワクとサバ、マレーシアの結成という順序で、マラヤの歴史的形成をとおり、この国の政治・経済・民族・文化などを明らかにしてゆく。博士が歴史学者であるだけに、歴史的発展過程からマレーシアがあきらかにされている。とくに、戦後のマレーシアの歴史に重点がおかれ、ゲリラ運動に詳しい。これは華僑によったものだけに、博士の特別の関心をひいたものであろう。

マレーシアの現状を知るには、その発展過程を明らかにする必要がある。そのために、本書は最もすぐれた文献であるといえよう。

いまこの遺著3冊を紹介するにあたり、Purcell 博士の偉大な業績をあらためて讃えたい。この博士を失ったことに、心から哀惜の念をおぼえる。(本岡 武)

Louis Barron (ed.) *Asia & Australasia*. in the Series of Moshe Y. Sachs (ed. & pub.) *Worldmark Encyclopedia of the Nations*. New York: Worldmark Press, Inc., Harper & Row, 1965. viii+392p.

このたび新訂版(第3版)が出た、全5巻よりなる *Worldmark Encyclopedia of the Nations* のうちの1巻である。このシリーズは、世界中の国々の一つ一つについて、歴史、政治、経済、社会その他、国家の諸局面について、専門の学者に簡潔に解説させたものである。対象とする国々は、たんに独立主権国家だけに限られないで、たとえば、Maldiv Islands, Persian Gulf Shaykhdoms などまで含んでいる。

一つ一つの国家について、50の項目が語られている。その項目を例示すると、

1 Location, Size and Extent, 2 Topography,